

連絡先：堺市南区新檜尾台3-3-11-102 森節雄 TEL：090-3651-5876（伊賀）
e-mail：eduosaka@gmail.com ブログ：http://eduosk.cocolog-nifty.com/blog/

例 会 案 内

◆日時 5月25日（土）18:00～

◆場所 クレオ大阪中央 研修室（1）
（地下鉄谷町線「四天王寺前夕陽丘」1・2番出口から北東へ5分）

◆内容

中原新教育長の教育政策を批判する

参加費：300円

大阪府・大阪市では、この4月から首長が教育目標を定めた教育基本振興計画がスタートをしています。それを実行する大阪府教育長には、松井知事の肝いりで中原徹元民間人校長が就きました。今後、中原教育長は、教育の論理を完全に無視して、「基本計画」で定めた数値目標の達成に向けてこれまで以上に学校にも教員にも子どもたちにも競争と成果を求めることが予想されます。それは、国際競争力を持つ「強い国」を目指すためだと豪語しています（「学校を変えれば日は変わる」）。早急に、中原教育長の教育方針について情報を集め、子どもの「教育への権利」の視点から批判を開始していきたいと思えます。

中原教育長は、教育委員会への政治介入の強化に意欲を示しています。「現行（教育委員会制度）では責任と権限の所在が不明確。責任は首長に一元化すべき」（大津市長との会談での発言）「もう教育委員はいらない。首長がトップでいい。」「首長がいつでも理由を問わず（教育委員）を解任できるようにしたい」（「学校を変えれば日は変わる」）等々、露骨な「教育の独立性」放棄論です。これは、安倍首相の「教育再生実行会議」の「第二次提言」さえ踏みこえる内容となっています。戦後一貫して危機にさらされてきた教育委員会の独立性がこの大阪から根本的にほり崩される危険性があります。

また、中原教育長は「君が代」不起立処分から一層強化しようとしています。就任後すぐの府立高校入学式で、「君が代」を「歌わなかった」教員が、「歌っていない」と確認され、「厳重注意」とされています。中原徹教育長は、9月までに「起立と斉唱を確認する客観基準」の作成を目指しています。教職員に対する「口をこじ開けてでも」する強制は、次に教職員が「子どもたちの口をこじあけてでも、大きな声で歌わせる」段階に進むことを目的にしたものに他なりません。

さらに、中原教育長は、昨年まで大阪市教育基本振興計画の「有識者会議」の委員を務め、大阪市の小中学校を縛る「基本計画」策定に大きく関わっていました。橋下市長は、第1回「有識者会議」で大阪市教育振興基本計画を大阪府内の小中学校にも適用することを宣言し

ていました。中原教育長は、まさに自ら手がけた「基本計画」を大阪府内の小中学校にも浸透させよることを目的にしています。その第一歩が「英語教育改革プロジェクト」です。大阪市教委が「基本計画」に基づいて準備しているフォニックスを用いた英語指導や小学1年から英語の導入の「ノウハウを吸収し」ながら大阪府内にも導入することを目指そうとしています。すでに大阪市内の中学校では、英検〇級獲得〇%を学校目標に掲げるところも出始めています。大阪市「基本計画」には、英語教育以外にも全国学テの学校別公表、学校選択制を口実にした学校統廃合、統一テストの導入等々、新自由主義的な内容のオンパレードです。これらの教育政策の推進が、大阪の学校と子どもたちにどのような影響を与えるのか、しっかり検討していく必要があります。

今回の例会では、現時点で明らかになっている中原教育長の教育方針の批判を行い、各論として今年の高校入試に現れた高校改革の現状について検討したいと思っています。是非、多くの皆さんの参加を呼びかけます。

【前回のワーキング会議報告】

安倍「教育政策」を批判する—— 「安全運転」をかなぐり捨てた安倍「教育改革」

安倍の直属機関「教育再生実行会議」は、2月26日の第一次提言「いじめの問題等への対応について」に続き、4月15日には第二次提言「教育委員会制度等の在り方について」を発表しました。会議は月一回、提言はふた月に一度という、異様ともいえる早いペースで「教育政策」を矢継ぎ早に打ち出しています。安倍の「経済」と「教育」に賭ける異常な執念を示しています。

提言の前者は「いじめ・体罰問題」に対応すると称した「監視社会」「管理社会」創設を目指すものであり、後者は首長が決める「教育長」に、各都道府県市町村の教育の権限を持たせ（すなわち首長が教育に介入でき）、学習指導要領等に対する国の権限を強めるというものです。参議院選挙までは、すべての政策で安倍は「安全運転」をされると言われていましたが、教育の分野においても決してそのようなことはありません。橋下・維新の会の大阪、石原都政下での東京で行われた、あるいは行われている反動的な教育政策と、そこで生み出された反動的な一部教育界と一部マスコミの雰囲気に乗って、かつては可能でなかった施策が次々実現されようとしています。私たちはその一つ一つの動きを監視し、反対の声を強めていかねばなりません。

戦後の教育委員会制度を「解体」し、国・首長・議会が政治介入を行うという第二次提言

第二次提言の要点は、①首長が任免を行う教育長が、教育行政の責任者として教育事務を行う。首長による任免・罷免は議会の同意を得る。②国は、学習指導要領等に対する権限を強化し、③地方公共団体の教育行政について、最終的には国が是正・指導の指示等を行えるようにし、④義務教育費の負担等について、国が十分に責任を果たす（すなわち、国が金を出すから口も出す）というものです。要は戦後の教育委員会制度を解体し、国・首長等が教育に直接政治介入するということんでもないものになっています。

戦前・戦中政治主導により、教育が侵略戦争・植民地支配に利用されたことへの反省から

設けられた直接選挙による教育委員会制度が、自民党歴代政権によって様々な解体攻撃にさらされ、ついには東京都教委、大阪府教委のように、例えば、ひのきみ攻撃の先頭に立ち、政治家の道具にまで成り下がったところへの最後の攻撃ともいえる攻撃がかけられようとしています。

大阪の「教育改革」、中原教育長「改革」への反撃が、安倍「教育改革」への反撃の先鞭

安倍「教育政策」の実現による教育・教育現場・教職員への攻撃に先立ち、すでに大阪では、橋下・維新による教育基本条例、職員基本条例の制定下で攻撃は開始され、ひのきみ処分反対・再任用採用拒否撤回等を中心に限定された形とはいえ反撃も開始されています。さらに今春大阪府では、例の口パク監視校長中原が、何と教育長に任命され、橋下の意向を受けた「英語教育」「国際教育」や、ひのきみ処分の基準を示すと発言する等動きを活発化させています。橋下・維新、中原教育長は、新自由主義的競争主義、市場原理に基づく差別・選別教育の推進、極右反動的な教育政策推進という意味では安倍と本質において同じものを持っています。彼らに対する反撃の強化が、安倍教育政策反撃への先鞭ともなるものです。大阪教育研としても反撃のための理論強化に一層努める必要があります。

【投稿】

リーフレット紹介

「強制連行の教材問題について意見をのべます！（現場教員向き）」
ぜひ読まれ、今後現場で起こっていくことへの参考にしてください。

2011年の秋、H市の中学校で例年どおり取り組まれた「戦争の歴史～日本の朝鮮半島植民地政策」に対して、地域の人からクレームが入りました。一番の問題は、それに対して学校管理職と教育委員会が、すべて鵜呑みにして受け入れ、「学習指導要領や教科書に記載がないことだった」と言い出し、先に学校教員とじっくり話し合うこともなく「資料の変更・差し替え」をさせたことでした。それが現場を不安と混乱に陥らせ、“自分たちがなにか、間違っただけをしたか”のような印象を与えたのです。教職員と学校の取り組みを毅然と守るべき立場のものが、簡単に外部からの攻撃に屈服したのです。またこの行為が、「新聞掲載」や、「府議会維新の会議員の訪問」などを呼び起こし、更に攻撃をエスカレートさせたのでした。

この問題に対して、「なにが問題だったか」「強制連行“はなかったことなのか？教えてはいけないことなのか？」と、「ざざまる会（近辺の教職員、市民で集まり始めた会）」で、ずっと話し合い、学習を続けてきました。「朝鮮人強制連行（岩波）外村大」「朝鮮人戦時労働動員（岩波）山田・古庄・樋口」などを読んでいき、数回「強制労働・連行に関する学者や市民運動家の学習会」にも参加し、研究者に相談しました。しかし、いざリーフレット作成にかかると、「今現場教員は、さまざまな問題をなげかけられ消耗し自信をなくしている。教師とは何か？何をどこまで自分で考えてやれる仕事なのか？」という問題にも答えるリーフにしないと、読んでではもらえない。」という意見が出て、その学習も開始。たいへん難しい問題で難航し、時機を大きくはずし、この3月にやっと完成しました。会の中では「他国ではもっと教員の自主性・自由が保障されていること。自分たちは何も間違っていなかったこ

と」について理論的確信を得ることができたのですが。

リーフレットの前半は「学習指導要領や教科書に記載がないと言えるか？ 仮にないとしても、それを教えることは間違いなのか？ 教員が教育活動を行う自由と権利とは？」後半を「強制連行は、なかったのか？」として「一問一答形式」の内容にしています。

ここで論拠とした「現在の教科書記述内容」や「教科書の近隣諸国条項」自体に、今自民党や維新の会が、ないものにしようと攻撃をかけており、一層困難な状況が進んでいますが、今の段階での闘いの武器になれば——という思いで、配布しています。

ご批判ご意見を出していただけたら、うれしいです。リーフに関する問い合わせ・意見は、以下までよろしく jinken_heiwa_0305@yahoo.co.jp

【投稿】

桜井智恵子さんの講演を聴いて 「大津いじめ自殺」事件と子どもの権利を考える

桜井先生のお話を聞くのは2回目でしたが、似たようなテーマでありながら前回とは違う内容で、話題の多さに驚きました。その中でたった一つ同じ話だったのが、休み時間が憂鬱な子どもが多いことでした。みんなのノリに合わせるために神経を使い、それについて行けなければハブられるという子どもの現状は、何度聞いてもため息が出ます。一昔前までは、「学校へは友達に会うために行く」「学校で楽しいのは給食と休み時間」が一般的だったと思います。「普通」じゃない事は悪いことで、大人は人間関係より学力が大事と思っている、人に合わせるのが苦手な子どもは誰にも思いを伝えることができません。管理され閉ざされた子供集団の中で、「学力」競争に駆り立てれば、いじめは必然的に起きると言われました。

日本のいじめの特徴として、年齢が上がるにつれ「傍観者」が増え続けるが、イギリスやオランダでは中学生になると「傍観者」が減り「仲裁者（止めに入る）」が増えるそうです。それは、多様性を排除し、多数に順応する事＝大人になることが求められる日本社会を反映しています。

10代の子どもの自殺原因で、最も多いのは「進路」の悩みだそうです。若者の正規雇用率の低さ、劣悪な労働環境、勉強しても報われない現状は子どもの問題ではなく社会の問題です。安倍政権はいじめの本質を考えず、教育予算を削る一方で、家庭教育力が低下していると「徳育、学力向上、体育」を押しつけてきます。すべては自己責任です。（低下どころか「家庭教育力」などと言うことばは1990年以前にはなかったそうです。）

このように孤立分断させて支配しようとする政権の側の動きに抗し、「市民がまとまって『知』を結束させよう。子どもの声を聞かせてもらおう。社会や制度をゆるめ大人も働き方を調整していこう。」と穏やかに呼びかけられたように思います。

お話の中で紹介されたヤヌシュ・コルチャックの本を絵本も含めて少し読みました。子どもは生まれたときから人格があり、子どもなりに考えている。しつくと称する暴力はあり得ないことを改めて認識しました。

子どもの声を聞くこと、声を聞ける環境を作ることで、いじめ自殺も体罰もなくせると確信しました。